
まほらぶっ！！《異世界で最強チート主人公に転生してハーレムを作っちゃおう！？》

天地乖離す開闢の星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まほらぶっ！！《異世界で最強チート主人公に転生してハーレムを作っちゃう！？》

【Nコード】

N9523H

【作者名】

天地乖離す開闢の星

【あらすじ】

この物語は神様のちょっとした手違いで死んでしまった【白神璃音】↑（転生後名前が多少変わります）が異世界に最強チート主人公として転生し、その広大な異世界を駆け巡るドタバタハーレムバトルコメディ？です！

作品介绍（前書き）

初です

色々至らない点も多いと思いますがよろしくお願いします

この物語には色々な漫画の技や名前が入ると思います
その点を理解した上でお願いします

作品介绍

この物語は、ちょっと漫画＋アニメ＋ゲーム好きの高校生【白神璃音】↑（転生後、名前が多少変わります）が、異世界にて繰り広げるドタバタハーレムバトルコメディ？である

第一話・全ての始まり？（前書き）

ついに始まりました！！

初めてなので駄文になるかと思いますがどうかよろしく願います！

第一話・全ての始まり？

俺の名前は白神^{しらがみ} 璃音^{りおん}ちよい漫画＋アニメ＋ゲーム好きの高校生だ

べ、別にオタクって訳じゃねーぞ！

まあ高校に通いながら平凡な毎日過ごしていて俺はしばらくはこんな毎が続くと思っていたんだ……

ある日の学校帰り

『あゝ今日も疲れたゝ

やゝと学校終わったゝ

今からどうすっかなゝ帰っても暇出しなゝ』

「考え中」

『んゝゝゝブックオフでも行くか！

よし！そうと決まればLet Goだ♪』

迷った挙句古本屋って……

ホントに暇な主人公である（呆）

「移動中」

『到着

さてと、今日はネ○までも読もつかな

(んゝやっぱ面白いね♪

・・・ん?)』

キキイーーーーー!!!!!!

ドカアアアン!!!!!!

この日、俺は死んだ・・・・・・・・・・と思う『んっ・・・・・・・・ここどこだ?俺どうなったんだっけ?・・・・・・・・・・そうだ!確か学校帰りにブック〇フによつて急にトラックが店に突っ込こんできてつて、じゃあ俺は死んだのか?もしかしてここは所謂あの世つてヤツ?』

パアアアア

すると、突然周りが光りだした

『Σ!!!な、何だ!?!』

光が収まるとそこには、純白の法衣に身を包み、背中に美しい翼を持ち、銀髪碧眼、璃音に並ぶほど顔立ちが整った＋プロポーシヨンのとれた体の男が立っていた（↑璃音は自分は気付いていないが100人中100人が、カッコイイ、キレイなどという程顔立ちが整っており、腰あたりまである黒髪に金色の瞳、モデル並の体型で街を歩けば当然の様に注目の的となる

学校では非公式ファンクラブができる程モテモテだったが、テだったが、テだった、本人が超がつく鈍感であるため全く気付いていない・・・）

閑話休題

『・・・誰？』

すると、その男が口を開いた

「はじめましてだな

俺はお前らがいう神様みたいなもんだ」へっ！？神様？何言っちゃってんのこの人？頭大丈夫？精神科の病院に連れてった方が良くね？

「俺の頭は正常だし、病院も必要ない」

『Σ何人の心勝手に読んでんだよ！人権侵害だ！慰謝料請求するぞ！個人情報保護法舐めんな！』

「まあ落ち着け

俺が来たのはお前をここに呼んだ理由を話すためだ」

『Σお前が俺をこんなトコ呼んだのかよ！？

さっさと元の場所に帰せよ！」

「まあ待て、とりあえず話をk」そんなのどうでもいいからさっさと帰せって」

「だから待てって

とりあえず結論から言つとお前が元の場所に戻るのは無理だ」

『おい！無理ってなんだよ無理って！

お前が連れてきたんだろーが！』

「いいから落ち着け

今からワケ話すから

お前が帰れないのはお前がすでに死んでるからだ」

『あゝやつぱり？

俺も薄々思ってたんだよねゝやつぱり死んでたかゝ』

「気付いたのか……」

実は俺が来たのはその事に少々手違いがあつたからだ」

『手違い？』

「そうだ

お前は本来あの事故で死ぬ筈ではなかったんだが……えゝつと、何というか実は俺が間違えてお前を死なせちゃったんだよね……すまん」

『……じゃあアレか、俺は本来まだ死ぬ筈じゃあなかったのにそつちが間違えて俺を死なせちゃったワケだ

へえゝ神様とあるうものが本来死ぬ筈のない俺を死なせちゃったん

第一話・全ての始まり？（後書き）

どうでしょうか？

間違えがあったらすいません

これからも読んでもらえるとありがたいです

第二話・異世界への旅立ち（前書き）

3話目です

第二話・異世界への旅立ち

『異世界？』

「そうだ

まあお前が死んじゃったのは俺のせいでもあ」『いや、全面的にお前が悪いだろ』

「はい すいません

私が全て悪いです」

『分かればいい

で、何で異世界？』

「このまま死なせるのは流石に不幸過ぎるし、元の世界は無理でも違う異世界ならOKだしな

どうする？別に無理にとは言わないが」

『んゝゝそうだなゝ確かにこのまま死んでもつまんねーしなゝせつかくだし行かせてもらうよ』

「よゝし、分かった！

じゃあせつかくだし向こうでの設定でもしようか！
大抵の事なら何でもいいぞ」

『へえゝ流石神様

ホントに何でもいいのか？』

「おう！！元々俺が悪いんだしなせめてもの償いだ！遠慮しなくて

もいぜ

どんとこいや！

どうせなら超チートでいこうぜ

とりあえずお前が知ってる漫画やアニメ、ゲームの技 能力無制限
いつとくか！？」

『そうだな〜んじやとりあえずそれで』

「了解い〜」

よし！次はどうするよ？」

『んじやあ、運動能力も神並で知能の方も戯○シリーズってあるだ
ろ？アレの七愚人も軽く超す位超がつく程の天才で』

「おーけーおーけー」

『後、ガツ○ユに出てくる“答を出す者”^{アンサー・トーカー}とリ○ーンの“超直感”
アイ○ールドの“神速のインパルス”で〜

武器は全て完璧に扱える感じで

あつ、そういえば異世界ってどんな世界なワケ？」

「そうだったな！

異世界の説明してなかったな！

異世界っーのは、まあ異世界というよりお前がこれから行く世界は、
魔法が日常にある世界だ基本的には種族は人間だが結構色々な種族^{ヒューマン}
があるぞ

後は元の世界と変わらないと思うぜ？学校とかもあるし」

『わかった

じゃあ魔法があるなら魔力があるだろ？』

「ああ あるぞ」

『んじゃその魔力は超多目で

んゝそんなモンかなゝ？』

「おし！じゃあ今から飛ばすぜ

言い忘れてたけどアツチ行っても俺と連絡とれるからな
連絡とりたかったら頭の中で念じれば繋がるからな

俺はだいたい暇だしな大抵応じれると思うぜ」

暇ってやる事ないんかい（呆）by 創世神

『あつ、そうだ！

その連絡する事だけど最初の方は知らない事にしといて適当な歳に
なったらそっちから連絡してその時に全部思い出す感じで頼むわ
その方が面白そうだし

可能か？』

「別に問題ないが、連絡は俺の判断でいいんだな？」

『おう！』

「じゃあ送るぜ」

パアアアア

リオンの下が輝いた

『じゃあまたなー！！！』

「おう！じゃあな！」

こうしてリオンは異世界へと旅立った・・・

「連絡するのいつにすっかな」
「10歳あたりでいいか！」
「うん！そうしよう！」

第二話・異世界への旅立ち（後書き）

文章で出てきた能力の説明です！

アンサー・トーカー

【答を出す者】物事に対して予知、予測するのではなく、その物事に対する適切な答えを瞬時に出せる能力

戦闘の例だと、どうすれば攻撃をあてられるのかの答えを瞬時にだせることができる

【超直感】簡単にいえば凄く当たりやすい勘

【神速のインパルス】凄く素早く反応できる能力（通常の人との比は想像にお任せします）

ちなみにこれらはサブ能力なのではっきりと文章に表すことはあまりないと思います

第三話・親はか登場？（前書き）

4つ目です

ついに話は異世界に！

主人公の親が登場します

第三話：親ばか登場？

ある病院の廊下

$$\cdot \cdot \cdot T'' T'' T'' T'' T'' T'' T'' T'' T'' T''$$

「ハアっハアっ」

一人の体格のいい男が息をきらせながら走っていた

男の名は「ブレイズ・クラウディア」実は魔法協会の総帥でもある世界でも最強の实力を持った男である

滅多に息などきらすことのない男だか今、彼は愛する者のために走っている

そして彼はある一室にたどり着くと、勢いよく扉を開けた

ガラア！！

「リーシャ!!」

扉を開け部屋に入ると、部屋の奥のベッドにまさに絶世の美女と呼ぶにふさわしいもしかするとそれでも足りない位美しい女性が、一人のこどもを抱いていた

「あなた、静かにして

「この子が寝てるのよ？」

「おっおう！悪かった」

「わかってくれたならいいわ♪」

この女性には「リーシャ・クラウディア」「ブレイズ・クラウディア」の妻でありブレイズと同等の力を持つ魔導士である

ちなみにこの世界では生まれると普通はみな魔法協会に登録される

「それよりも見てあなた、綺麗な寝顔してるわv v」

「リーシャの子だからな、綺麗なのは当たり前だ」とブレイズは自慢気に言った

「フッフ ありがとう」

リーシャは見るもの全てを魅力してしまいそんな笑顔を見せた

「それで、この子の名前なんだけど・・・」

「おう！決まったか？」

「うん」

リオンっていうのはどうかな？」

「リオンか・・・いいんじゃないか？俺の考えてたマッスルよりいいしな」

「あなた・・・マッスルはないと思うわよ？（汗）」

「そうか？まあ気にすんな」

『んうゝあゝう』

「あら、起きたのねリオン」

『あつ！ あつ！』

「フッフ 可愛いわねゝv v」

ねえあなたもそう思わない？」

「ああ そうだな」

しばらくの間二人は笑顔でリオンを見ていた
軽く親ばかであるby創世神

しばらくたってブレイズが突然真面目な顔になりリーシャに声をかけた

「なありーシャ、気づいてるか？」

「ええ、リオンの魔力の事でしょ？」

「ああ 感じる魔力がハンパじゃないな

俺たちの魔力を合わせたのよりも遥かに上だ

しかも、抑えられてる感じがする この抑えがなくなればさらに上がるだろう」

「そうね。だから私たちがしっかり力の使い方を教えないとね」

「大丈夫 俺たちの子だ どんな修行でも耐えきるさ」

「それもそうね」

私たちの子だものね成長が楽しみだわ」

何気なくともない事を平気で言ってる最強夫婦だった……

リオンは生き抜けるのか！？
リオンの命運やいかに！？

第三話・親ばか登場？（後書き）

感想お待ちしております。

第4話・真の力の目覚め（前書き）

主人公の記憶戻ります

第4話・真の力の目覚め

リオンが生まれて10年が経った頃……

ある森の草原で一人の男と一人の少年が戦っていた

『はあっ!!』

少年の拳が男に向かう

「フッ」

しかしその拳は男に避けられてしまう

「リオン!この程度か?」

『そんなワケねえだろ!?

せえいつ!!』

ドガアアアアン!!

リオンと呼ばれた少年の踵おとしが地面を大きく砕いた

「へっ!威力だけは相変わらずだな!

10歳でその力はねえだろ!?(呆)」

『うるせっ！魔法も使わずにガラにもない事言ってんなよ！？本気出しやがれ！』

「お前が使わないのに俺が使えるかよ！」

『俺は使わないんじゃないよ！使えねえんだよ！何回言わせんだ！？嫌味かコノヤロー！』

そうリオンは馬鹿げた位魔力がある筈なのだが何故魔法が一切使えないのだ
しかし身体能力や反射神経がバケモノクラスなので並の魔導士では相手にならないのだ……

『よし、今日はこんぐらいにするか』

『わかった』

じゃあ、向こうで休んでくるわ』

そう言ってリオンは歩いていった……

『まったく使いたくてもお前相手じゃ詠唱の隙をつかれるっーの（にしても、どうなってやがる？魔法苦手どころかひとつも使えないだど？）』

『ちっ！』

リオンは不機嫌そうに舌打ちした

『（まったく何で魔法が使えねーんだよめんどくせーな）』

「おい、聞こえるか？」

突然何かが話しかけてきた

『ああ？何だデメー？』

流石というのか全く動揺しないリオンだった

「約束通り来てやったぞ

さっそくだが記憶戻すからな」

『記憶？』

ツツ！?』

声がそういうと突然頭に莫大な量の情報が流れ込んできた

「うぁースゲーぜってー痛ーのに悲鳴あげねーよ

で、思い出したか？」

『ああ

久しぶりだな

・・・何て呼べばいいんだ？』

「・・・そうだな
空^{ソラ}でいーや」

『オツケー空

で何で俺魔法使えねーんだ？』

「ああそれは仕方ねーよ

お前の魔力はお前がマンガとかの技使ったためのヤツだからな
でもそういう技ならほぼ限界なく使えるから心配すんな」

『そついう事は先に言えや』

さつきガラにもなく焦っちまったじゃねーか』

「悪い悪い

じゃそろそろ行くわ

またな〜」

『おう、じゃーな!』

『さて

親父のトコ戻つか』

「おっ戻ってきたか」

「おかえりリオン」

『ん? 母さん来てたのか?』

「んじゃさっそく始めつか?」

そう言ってブレイズは構える

『まってくれ』

今度は二人できて欲しい魔法も使って本気でな』

「・・・（リオンの目本気だな）

リーシャ」

「ええ

リオンやるからには手加減しないわよ？」

『ああ』

「じゃあやるか」

そういつてブレイズとリーシャは距離をとる

ヒュユユウ

しばらく沈黙が続き一斉踏み出す

『ハアッ!』

「フン!」

リオンとブレイズが戦っていると後ろではリーシャが呪文詠唱をしていた

「(リーシャのヤツいきなりか)」

バツ!!

ブレイズが後ろに下がる

「いくわよリオン

《氷河の嵐》!!!」

氷雪を纏った大旋風がリオンを襲う

ドガアアアアアン!!!!

魔法の余波で周りが凍りつく

「ちょっとやり過ぎた?」

「いきなり上級かよ
容赦ねーな」

「あらリオンが本気でって言ったのよ？
手抜きはあのこに対する侮辱よ？それにあの程度でくたばる子じゃないわ」

煙がはれるとリオンの立っていた場所に長方形の楯が立っていた

『第2の術』
ラシルド

楯が消えると無傷のリオンがいた

「何だあの楯は？
見たことねえ魔法だな」

『俺は思い出したんだ本当の力を……』

「へっ やつと魔法使えるようになったか
これはマジでやらなきゃな」

「ええいくわよブレイズ」

「ああ」

そして戦いは次の日の出まで続いた

その場は見事破壊つくされていた

こうして3人は見事に環境破壊に貢献したのであった・・・

第5話・ライバル登場？（前書き）

テストに追われています・・・

この回ではリオンのライバル的存在になるものが登場します！

第5話・ライバル登場？

リオンの記憶が戻ってから5年が経っていた

『じゃあ行ってくるわ』

「気をつけてね」

「しかし流石俺達の子だな

あのルナティアス魔法学園の特待生に選ばれるとはな！」

「もう私達が本気でいっても勝てないですからね」

心配はないと思うけど気をぬいて怪我しないよーに」

『わーったよ

じゃあ行ってくるわ』

「私達も仕事があるけどたまには連絡ちょうだいね」

「しっかりやれよ」

『はっ、たりめーだ』

こうしてリオンはルナティアス魔法学園のある【王都ルナティアス】
に向けて旅立った

『やべっ地図ねーや
まあ何とかなるだろ』

どこまでもお気楽思考なりオンであつた……

【王都ルナティアス】

リオンは街の中心部にいた

『でけーな

流石 王都ってヤツか？

ん？』

すると数人の男が一人の少女をナンパしていた
少女の方はあからさまに嫌がっている
『ったく、しゃーねーな』

「いや！止めて下さい！」

「いいじゃねえかよ」

「俺たちと遊ぼーぜ？」

「いやですつて！

放して下さい！（誰か助けて！）」

「いいからこいよ！」

男の一人が少女の手首を持ち引つ張った

「痛ッ！」

『おい、アンタら嫌がつてんじゃねーかよ
その手放してさっさと失せな』

「何だこのガキ？

俺たちとやる気か？」

『めんどくせーな

やるならさっさとこいよ』

その一言が男達の勘にさわった

「このガキイ！！」

『はっ、おせーよ！』

「何！何処にいくグベラッ！！」

「何い！？」

『こつちだ』

もの数十秒で男達は全滅した

『おい、アンタ大丈夫か？』

「あっはい

ありがとうございます」

少女は笑顔でお礼を言った

その少女は腰辺りまである美しい金髪に碧色の瞳をしておりスタイルもよい超絶美少女だ
そんな美少女に笑顔を向けられたら普通は顔を真っ赤にしてしまうが、残念ながらリオンは普通ではないので笑顔で返事をかえす

『まあ気にすんな』

「Σッ！／／／／／（この人凄くカッコイイこの笑顔は反則だよ）
」

『大丈夫か？顔赤いぞ？』

「だ、大丈夫です！／／／／／」

『そうか？ならいいが……
そっぴやアンタルナティアス魔法学園の場所知ってる？』

『はい、あなたも入学されるんですか？』

『あなたもっつーことはアンタも?』

『はい、私シア・セフィラスって言います』

『リオン・クラウドディアだ

よろしくな♪』

「じゃあ行きましょうか

時間もそろそろ危ないですし……」

『じゃ行くか♪』

こうして二人は学園に向かって歩いていった

▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲

『ここがルナティアス魔法学園か
ここでもけえな』

「じゃあ入学式があるので、また会いましょう
同じクラスになれるといいですね」

『そーだな♪』

つと俺も早く行かねーと』

リオンも急いで入学式の場所へ走っていった

入学式会場では殆どの者がガチガチに緊張したり真剣に話を聞いたりしているが何人かの例外もいた……言わずともその内の一人はリオンだ

『（……暇だ早く終わんねーかな……）』

リオンは頬杖をつき見るからに退屈そうにしていた

「此にてルナティアス魔法学園入学式を終了する」

長きにわたる入学式が終わりリオンは席をたち背伸びをしていた
『んっ〜あ〜タルかった』

「リオン君久しぶりじゃな」

すると長い白髪にこれまた長い白髭の爺さんがリオンに話かけてきた

『……誰だっけ？』

「ワシじゃよワシ！」

『……あー！あの時の爺さんか！』

「やっと思い出してくれたか……」

『爺さん何でここにいんだ？』

「ワシ、ここの校長なんだけど……」

『何だよ校長のくせにあの程度の魔物に手こずってたのかよ
情けねーな』

「うぬ……」

そうこの校長名をウルド・ロックカードといい 3年前森で魔物の
大群に襲われピンチな時に偶然見かけたりオンがあっという間に全
滅させ彼はその力に驚嘆し彼に特待生の推薦状を送ったのだ

『まいいけどよ』

何か向こうが騒がしいな』

「お主と同じ特待生の一人がさっきまで居眠りしておっての
おそらくそれが他のものの勘にさわったのであろう」

『ちよつと見てくつか』

「入学式で居眠りとはいいいご身分だな？」

5人組のリーダー格の男が居眠りしていた男に言った

「別に寝ちゃいけねー決まりなんてねーだろが」

居眠りしていた男は赤毛と黒毛で茶色の瞳をしておりリオンに負けず劣らずの美形だった（イメージとしてはネギまのナギの感じです）

「うるせえ！とにかくてめえはむかつくんだよ！」

「んだと？やんのかてめえら？」

「上等だぶつ潰してやる！」

「来な雑魚共」

そう言つと男達が手にもつていたステッキをかざした

「くらえ！《ホーリーアロー》！」

魔法の光の矢が赤毛の少年を襲う

「はっおせーよ」

しかし少年は一瞬で男達の横に移動した

「くらいな!!」

少年は手のひらに雷属性の魔力を溜めて男達に打ち付けた

ドゴオオオン

男達はあっけなくぶっ飛んだ

『なあ爺さんアレこっちにとんで来てないか?』

「そうじゃのう間違いなくこっちにぶっ飛んで来ておるの
ワシが止めようか?」

『いや、別にいい』

《縛道の三十七 吊星》

リオンがそう言うつと魔力壁が出現し五方向に魔力を伸ばし男達を受け止めた

「相変わらず変わった術を使うのう」

少年の方を見ると野次馬に囲まれ質問攻めにあっていた

「うるせー!!!」

どうやら耐えきれなくなったのか甲高い声を出して人ごみの中から出てきてリオンの目の前に立った

『何か用か?』

「お前のさっきの魔法何だ?見たことなかったな」

『アレは魔法じゃなくて鬼道つーんだ

それにしてもお前けっこうやるなさっきの瞬動なかなかの速さだったな』

「いや、お前もあんぐらい出来んだろ」

『まーな』

「いや少しは否定しろよ」

『お前なら否定するか？』

「しねーな」

『だろ？』

「ハッお前とは気が合いそうだな」

『だな俺もそう思うわ』

「俺はライハ・レオンハートだ お前は？」

『リオン。リオン・クラウディアだ
よろしくな』

「ああ」

「フオッフオッフオッフ

さっそく仲が良くなった様だの リオン ライハ」

『何だ爺さんライハの事知ってんのか？』

「彼はお主と同じ特待生じゃよ
戦闘センスならお主と負けておらんよ」

こうした会話をしていたその時

「ライハー！……！」

突然現れたショート碧髪朱眼の美少女がライハの頭を叩いた

「いつてえ！！何すんだリン！（怒）」

「アンタ入学式早々問題起こさないでよ！！」

「うつせーな 仕掛けてしたのはアッチからだぞ？」

「じゃあもう少し手加減しなさいよ！」

「手加減したぞ！

アイツらが脆すぎなんだよ！」

などといきなり口喧嘩を始めた二人

『なあ爺さん止めるべきか？』

「フオッフオッフオッフ元気じゃのう」

『しばらく傍観してるか』

その口喧嘩は数十分続いた（長え！！）

会場にいた他の生徒はリオン達を除いて皆退場していった

「とにかく

これからは気をつけてね！」

「はいはいわかりましたよー」

『ようやく終わったな』

「すみません校長」

「フオツフオツフオツかまわんよ」

『で、ライハ 誰だ？』

「ああ俺の幼なじみのリンだ」

「リン・リンクスよ。よろしくね」

『リオン・クラウディアだ』

「じゃあそろそろ寮に戻りなさい」

『だな』

「じゃあ行くか』

「「おう／ええ」」

ちなみにこころナティアス魔法学園の学生寮は1年 2年 3年
男女 でわけられている

学生寮前

「じゃあ私こっちだから」

『「おう、じゃあな」』

そう言うところには女子寮の方へ歩いて行った

そしてリオン達も男子寮へ入り受付へ向かった

受付嬢の所まで来ると

『一年生のリオン・クラウディアだ』

「ライハ・レオンハートだ」

『俺達の部屋の場所を聞きたいんだが?』

「「Σひゃい! (何この子達めちゃめちゃカッコイイノノノノ)」」

受付嬢達は滅多にお目にかかれない超絶美形二人に話かけられ驚き
異様な声を出してしまった

「で、俺達の部屋は?」

「は、はい! リオン様にライハ様ですね少々お待ち下さい……
……では、リオン様は私がライハ様は彼女が案内します
では、ついて来て下さい」

『んじゃまたなライハ』

「おう」

▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲

「ここがお部屋となっております。」

『全員個室なのか？』

「いえ、通常は4〜6人で一部屋ですが、リオン様は特待生なので個室です」

『ふーん まあいいか
ありがとな』

そう言ってリオンは笑顔を向ける

「Σ！！！！／／／／／／

で、では失礼します！！／／／」

ボン！と効果音が出そうな位受付嬢は顔を赤くして戻っていった

『・・・何だっただ？

まあ部屋入るか』

しかし鈍感なりオンがそんなことに気付くわけではない・・・

『おお！スゲー！
風呂まであるぜ！』

リオンの部屋は学園の中でも最高のものだった

部屋にあるものは……

バスルーム

エアコン

大型モニターテレビ

冷蔵庫などの一般的な家具

転移魔法陣

数々の魔法に関する書物

ディレイ魔法球（ディレイ魔法球はネギまのエヴァの別荘の様な感じで外の時間の流れから隔離されるもので魔法球の中での1日が外での一時間になるという優れものだ）

などなど他にもたくさんの家具などが置いてあった

リオンにとってはディレイ魔法球が最も有難いものだった

ちなみにディレイ魔法球はめっちゃめっちゃ高い

学園の生徒は皆カードを使って物質を購入する

最初はレッド次にブロンズ、シルバー、ゴールドとランクがあがりカードに入る最高額が上がる

ちなみに特待生は黒いブラックカードを持ち学園内の物質は全て無料なのである故に金の心配は無用

リオンは軽くシャワーを浴び部屋にあるクローゼットに入っている
緩めの服に着替えた

『よし！メシ食いに行くか』

リオンは食堂に向かった

第5話・ライバル登場？（後書き）

すいません

全然ハーレムになってませんね・・・

予定ではリオンとライハのWハーレムを予定しています

ちなみにこの世界では一夫多妻制です！

人物紹介（前書き）

この辺りで人物紹介を入れました

人物紹介

リオン・クラウディア

15歳

身長185cm 体重65kg

切れ長の金色の瞳に漆黒のナチュラルストレートの髪。多少ボリュームもある。肌の色は白く、目鼻立ちもはつきりしている。一つ一つのパーツが厳選されたかの様な超絶美形であるが決して女には見えない男らしさを醸し出している。モデルの様なスタイル。細い様に見えて筋肉はしっかりついている。そこいらのモデルより圧倒的にカッコイイ。ファッションセンスもいい

容姿端麗 運動神経最強 魔法は完全にチートの領域 成績超優秀
家事も完璧のまさに最強超人

異世界の魔法は一切使えないがマンガやアニメの技を無尽蔵に使う
身体能力もバケモノ並
性格は基本大雑把というか細かい事は余り気にしない 基本的には優しい 鈍感

よく使う技はネギまの魔法 鬼道 ガッシュの呪文 錬金術などなど
どまさに最強

魔法世界最強クラスの両親を持つが二人を合わせたより遥かに強い

ライハ・レオンハート

15歳

身長184cm 体重61kg

ポリウムのある赤毛と黒毛 茶色の瞳（イメージはネギまのナギ・スプリングフィールドで）リオンに負けず劣らずの超絶美形。スタイルもリオンといい勝負

魔力超膨大 運動神経や戦闘センスなどはリオンに並ぶほど
得意属性は 雷 風 光
頭の方はちよつと・・・

性格はリオンと似ている

リオンのライバル&親友

シア・セフィラス

15歳

腰辺りまである美しい金髪 碧色の瞳の超絶美少女

身長160cm 体重は秘密だそうです

スタイルはよく 胸の大きさもなかなか

どちらかというと綺麗系の美少女

成績は優秀 運動神経はそこそこ 魔法はかなり才能がある

得意属性は光 風 水

性格はかなり優しい。たまに天然が入る

リン・リンクス

15歳

肩辺りの水色に近い碧髪 朱色の瞳の超絶美少女

身長162cm体重は聞いたら殴られたため不明

スタイルはなかなか胸の大きさもいい感じ

健康美少女って感じ

どちらかというと可愛い系の美少女

成績は余り良くないが運動神経はかなりいい 魔法の才能もある

得意属性は風 氷 土

性格は明るい 元気って感じ。ツッコミは激しい
ライハのストッパー

ライハの幼なじみ

昔からライハの事が好き

人物紹介（後書き）

また書きます

第6話・食堂での再会（前書き）

はい！こんにちは！

ただいまめっちゃ眠いッス

この回でハーレムメンバーが増えます！

第6話・食堂での再会

自室で着替えを終え食堂へ向かうリオン

食堂へ向かう廊下……

『ん？ライハにリンじゃねーか』

「おおリオン！お前もこれからメシか？」

『おう、一緒に行こーぜ！』

「「いいぜ／いいわよ」「」

こうして3人は食堂に向かった……

『食堂もでけえな……』

「まあいいじゃん
早く入ろーぜ」

ライハとリンは食堂の中に入っていった

『おっと俺も行かねーと』

と、食堂へ入ったりオンだが入った瞬間誰かとぶつかった

「キヤツ！」

『おつと』

ぶつかっただのは水色の髪で紫色の瞳をした美少女だった

おそらく一年生だろうだが年齢の割りに小柄だがその体型に不釣り合いなほど胸はかなり大きさがある。見るからに可愛らしい容姿をした少女だった

リオンはぶつかり倒れそうになった少女を支えた

「悪い大丈夫か？」

「はっはい！すみません！」

「いいぜ 俺も不注意だったしな」

『怪我なくて良かったよ』

そう言ってリオンはその少女の頭の手をおき笑顔で言った

「ふえっ！
／
／
／
／
／
／
／」

その少女はリオンの笑顔に見事にノックアウトされてしまった

「俺
リオン・クラウド
アంతは？」

「わ、私、水無月 楓です！／／／／／」

その少女楓は顔を赤くしながら言った

「大丈夫か？顔赤いぞ？」

「だ、大丈夫です！／＼／＼／＼／」

そつか

じゃまたな 楓

「はい！」

そう言ってリオンはライ八達の方へ歩いて行った

『ポオ~~~~／／／／／』

こうしてまたひとり美少女をおとしたリオンだった……

▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲

「おせーぞ」

『悪い悪い』

「リオン紹介するわ

私と同室のシアとソフィアよ」

『ん？シアじゃねーか』

「リオン君／／／／／」

「何？知り合い？」

「危ないところを助けてもらいました」

『まあそんなトコだ』

「成る程／／そこでリオン君にノックアウトされちゃったか／／」
とリンがニヤニヤしながら言う

「／／／／／」

『?????』

リオンは何を言っているのか理解出来ない様子だ……

『で、そっちは?』

「私ソフィア・フロラスです」

『リオン・クラウドディアだ
よろしくな』

笑顔で手を差し出すリオン

「は、はい よろしくお願いします／／／／／」

「アレアレこっちもかな」
再びニヤけながら言うリン

「／／／／／」

「むうううう」

ソフィアは顔を赤くしシアは若干拗ね気味だ……

「なあなあ早く食おーぜ」

『そうだな』

じゃあ注文しに行くか』

「あ、私達もう注文したから先に席とつとくね」

「おお頼んだ」

『すいませ〜ん』

「あら〜また可愛い子が入ったわね〜ん
お姉さん何でも作っちゃうわよ〜」

中からでてきたのはお姉言葉を喋る男だった
しかしリオン達はそこを軽く流した

『Sセット二つくれ』

「はいはい

二つで2万4000Jね〜」

高い。セット一つで1万越は高い。普通はA〜Dセットで3000
〜800Jだ

1万越のSセットなんて上級生でも普通は頼まない

頼むのはゴールドカードを持った極一部の上級生か職員である

とても一年生が頼むものではない何故なら入学したての一年生はま
だギルドからの依頼クエストを受けられないからだ。

ちなみにこの世界の通貨はJだ……

『これで無料になんたる?』

そう言って二人は特待生専用のブラックカードを出した

「あら〜アナタ達が例の特待生?

ちよつと待つてね」

そう言つて数分後……

「お待ちどうさま」カレン特製Sセットよ」

どうやらこのオカマはカレンというらしい……

「もう出来たのか？」

早えな」

「じゃあ行こーぜ」

「うわーアナ達Sセット？贅沢ねー私達なんかCセットよ？」

「「特待生だからな」」

二人はさも当然の様に言つたが嫌味には何故か聞こえない

こうして5人は楽しい昼食を終えた……

第6話・食堂での再会（後書き）

美少女二人の人物紹介は後々・・・

第6話・親衛隊をぶっ飛ばせ！（前書き）

余り戦闘シーンが入れれません

第6話：親衛隊をぶっ飛ばせ！

入学式の次の日朝リオンはライハ達と一緒にクラス分けを見に来ていた……

ガヤガヤ

『ずいぶん混んでるな……』

ん？楓じゃねーか！』

「「むっ！！」」

「Σふえっ！

あ、リオンさん！／／／／」

「「リオンくん／さんお知り合いなんですか？」」
シアとソフィアは声を揃えて言った

『まあ知り合いっちゃあ知り合いだな』

「み、水無月 楓です！

楓って呼んでください！」

「シア・セフィラスです
よろしくね楓ちゃん」

「ソフィア・フローラスです」

「ライハ・レオンハートだ」

「リン・ルクスよ」

楓はリオンかな？」

リンがニヤニヤしながら言う

「ふえっ！／＼／＼／＼」

「むう~~~~（楓ちゃん／さんって胸大きな／リオンくん／さんも胸の大きい子がいいのかな）」

シアとソフィアも大きい方なのだがやはり楓の胸の方が大きかった・
・
・

『俺って、どういうことだ？』

「「「（・・・鈍感）」」」

女性4人の心が見事に一つになった

「そんなことよりクラス見に行こーぜ」
『そだな』

『全員1組か・・・』

「みんな一緒に良かったね」

「そうですね」

など談笑していた空間が急に崩される

「「「「「リオン・クラウディア！ライハ・レオンハート！」」」」」

『「あ？」』

振り向くとなかなかの人数の男共がいた・・・

『誰だデメーら？』

「我々はシアちゃんとソフィアちゃん、楓ちゃん、リンちゃんの親衛隊だ！」

どうやらシア達のファンクラブの男共らしい

どう見ても嫉妬にかられた醜男の集団にしか見えない・・・・・・・・

「その親衛隊が何か用かよ！」

「知れたことよ！」

リオン・クラウディア！ライハ・レオンハート！我々の女神達と楽しくお喋りしやがって！成敗してくれる！！！」

完全な逆恨みだ

『だつてよ

ライハ、お前やって』

「やだねんどくさい」

『じゃあジャンケンで』

『「ジャンケン・ポン」』

リオン　　グー

ライハ　　パー

ライハの勝利！

「じゃヨロシク」

『ハアめんどくさい』

「貴様一人で我々を相手にするというのは？
愚か者め！」

『どうでもいいから早くこい』
さもめんどくさそうに挑発した

「くっ後悔させてやる！
者共行くぞー！」

「「「「「おおー！」「」「」」」」

「ちょっと！ライハ！大丈夫なの！？」
「ん？ああ問題ねえよ
見てりやわかる」

『（はあめんどくさい……さっさと終わらすか……）（

行くぞ』

シュン

言い終わるやいなやリオンは瞬歩を使いその場所から消えた

「Σ!?!何処に行った!?!」

『遅い こつちだ

《破道の三十三 蒼火墜》』

リオンの手のひらから蒼白い炎が放たれた
ドカアアアアン

「「「「「ギアアアアアア!?!」」」」」

めんどくさいのでブーチの鬼道ぶっぱなしてやったぜ!

「「「「「Σなっ!?!」」」」」

「今ので半分はいったな」
ライハが冷静に判断する

『まだだ《ギガノ・レイス》』

リオンは凶悪面の王様候補の中級クラスの術を親衛隊に放った

ドコオオオオオン

「「「「「NOオオオオオ!?!」」」」」

しんえいたいはちりとかした

「相変わらず面白れー技使うな」

「（カッコイイ／／／／／）」

「おいアンタ達大丈夫？」

リオンラバーズ（笑）はその強さに惚けていた

『早く教室行こーぜ』

この事件でリオンのファンクラブが密かに結成されていたことをリオンは知らない……

第8話・リオンラバーズ結成！？（前書き）

はい、どうもお久しぶりです

最近忙しくて全く更新出来ませんでした・・・

これからがんばります

第8話・リオンラバーズ結成！？

リオン達が入学してから既に1ヶ月がたっていた……

『ふあ〜』

朝か……

リオンが目を覚ますと扉を叩く音が聞こえた

「リオンーメシ行くぞー！」

その相手はリオンと同じ特待生で一番の親友と言ってもいいライハ・レオンハートだ

『ああ〜今行く〜』

リオンは半分寝ぼけながらもベッドからおり、顔を洗い寝間着のジヤージを着替えた（ちなみにルナティアス魔法学園は基本的は服装は自由だ）

「おつせーぞ」

『悪い悪い（笑）』

じゃあ行くか』

▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲

【食堂】

「リオンーーーー！！！！」

『のわっ！って漣』

いつも言ってるんだろ？行きなり飛び付くなって？』

「えへへゝゝゝ」

『えへへじゃねえよ全く（呆）』

この薄桃色の胸辺りまである髪に蒼色の目の美少女は名を【如月^{きさらぎ}漣^{みお}】という

背は標準よりも低く一般的にロリキャラと呼ばれる美少女である

「こら、漣 リオくんが困ってるでしょ？」

漣がリオンに抱きついてしていると腰辺りまである茶色の髪に漣と同じ蒼色の目でやたらにスタイルのいい美少女が話しかけてきた

「あ！お姉ちゃん！

おはよう」

『美咲センパイ

おはようございまーす』

「おはよう、リオくん

ごめんね？漣が迷惑かけて」

この美女は【神夜^{かみや}美咲^{みさき}】このルナティア魔法学園の生徒会長であり、世界でもトップクラスの神夜財閥の一人娘である。ちなみに漣は神夜財閥と仲のいい如月コンツェルンの娘で美咲とは姉妹の様に育ったので今でも美咲の事をお姉ちゃんと呼んでいる

この二人はリオンの幼なじみでもあって美咲はリオンをリオくんと呼ぶ

幼なじみと言っても美咲達の親に会ったことはない

『いいよ別に今に始まったことじゃねーし』

「フフッありがとう」

などと談笑していると

「むう~~~~」

『どうした澪何勘ねてんだ？』

「むう〜リオンお姉ちゃんばかり〜

澪も構って欲しいのに〜

お姉ちゃんとはっかりイチャイチャして〜」

「みつ澪！／＼／＼べっ別にイチャイチャ何かしてないわよ！！／
／／／」

ごまかそうとしているが顔が真っ赤である……

「おーい、置いてくぞー」

『悪い、今行くー』

こうしてリオン ライハ 美咲 澪は食堂へ入っていった……

▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲

リオン達が食堂へ入ると

「「「待つていたぞ！リオン・クラウディア！ライハ・レオンハート！」「」」」

そこには醜男集団もとい美咲やシア達の親衛隊がいた

『はあ、またかよ（呆）』

お前他にやることねーのかよ………』

「うるさい！お前らがさっさ我々の女神達を解放しないからだ！！」

『いや、まず束縛してねーし（即答）』

「ええい！！うるさい！特待生だからって調子にのってんじゃねえ！！！！」

「（ピクツ）今アナタ達リオくんを侮辱しましたね？」

美咲の背後に黒いオーラが見え始める

『お、おい 美咲？』

「あ、あの美咲センパイ

何故手に魔力を溜めて呪文詠唱をしていらっしやるのでしょうか？」
と親衛隊の一人が恐る恐る聞くと

「リオくんを侮辱する人は許さないんだから！！！」

《アクア・スマツシャー》！！！！！！」

巨大な水の塊が親衛隊を襲う

「「「「のああああ！！！！！！」」」」

親衛隊は見事に激流に流された

水系魔法は本来攻撃系ではないためそこまでの被害はなさそうだ
（しかし美咲の使ったアクア・スマツシャーは結構威力があるため
ダメージがあることに変わりはないのだが……）

すると美咲は次に雷属性の魔力を溜め詠唱を始めた

『おい、美咲流石に水＋雷はキツイと思うぞ（汗）』

「大丈夫」

『（いやいや、全然大丈夫じゃねーだろ！！）』

リオンは心の中でツツコんだ

「美咲センパイ

お お待ち下さい！」と親衛隊が命乞いをする

「問答無用！

《スパーク・ショット》！！」

「「「「ギアアアアアア！！！！！！」」」」

電気の砲弾が親衛隊に直撃した

「さ リオくん席につこ」

『おう（ま、いっかアイツら不死身だし）』

哀れ親衛隊

結局その場にいた親衛隊は全員病院送りにされた

▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲

うって変わってリオン達の教室

ちなみにリオン ライハ シア 零 リン が1ーA ソフィア
楓 1ーD 美咲は一つ上の2ーAだ

「M Y同士 リオンにライハよ
武闘大会の事は知っているか？」

コイツの名前は朝倉99%が謎で構築されている男だ
ちなみに残りの1%は名字が分かる事だ

『「武闘大会？」

』

「そうだ

何でも毎年この時期にルナティアス武闘大会と呼ばれるものが開催
されるらしい

会場はこの王都ルナティアス屈指の規模を誇る武闘会場 【アジー

ル大闘技場】で行われるそうだと

しかも、この大会では王族も見にくるそうだと

生徒全員参加でランダムに二人一組選らばれ拒否権はないそうだと
ちなみにこの発端は学園長の気まぐれだそうだと

「へえよく知ってるな」

リオンの後ろから茶髪の短髪のリオンたちには劣るがなかなかの顔
立ちの男が話しかけてきた

『誰だっけ？』

「さあ？しらんな」

「右に同じ」

「ちょっと！俺だよ！俺！ 谷崎 海斗だよ！忘れんなよ！！」

『そんなヤツいたな』

「ヒドッ！」

「まあそれはおいておくとして
その選手組合わせは今日の昼放課にあるそうだと」

『武闘大会か・・・面白れーやってやるぜ！！』

「おい席につけー授業始めるぞー」

教師が教室に入ってきたのでリオン達は急いで席についた・・・

ちなみに上から ライハ リン 朝倉である

「どうせ俺なんて・・・」
海斗は隅の方でいじけ始めた

『そこ、ウザイから止める』

「酷い!!」

「もう我慢ならーん!!」

突然怒声が響き大量の社会のゴミ 負け犬 神の唯一の誤算 存在
自体が死罪 などなどの称号を持った男共が現れた

『またお前達か・・・』
懲りねーな』

「うるさい！行くぞ皆の衆！！今日こそ女神達を解放するのだ！！」
「」

「「「「うおおおおおおお！！！！」」」」

『あーめんどくせー』

と愚痴をこぼしながらも親衛隊の前に立ち塞がるリオン

『《五ツ星神器“百鬼^{ビック}夜行”》！』

リオンの腕に巨大な立方体が付きその立方体がいきなり棒状にのび親衛隊に突っ込んでいった

ドコオオオオン

「「「ぎゃあああああ！！！」」」

親衛隊は星となった……

親衛隊をブツ飛ばしリオン達が昼食を続けていると

「ピンポンパンポン 只今からルナティアス武闘大会のペア発表を行います」

「へっやっとか！」

『待ちくたびれぜ！』

リオン ライハのバトルマニア組がワクワクしながら聞く

「「「「（リオンくんだったらいいな）」」」」

リオンラバーズ（笑）はリオンと組むことを考えて聞く

「それでは発表します！ 第一組目は リオン・クラウドディアシア・セフィラス！！」

この瞬間大多数の男女が地におちた

リオンは容姿よし運動神経よし成績よしの超人のためファンクラブが結成されており

シアはルナティアス魔法学園八大美女の一人でもあり、当然親衛隊も結成されているので男女共に人気が高い。

当然ながらその二人と組みたいと思う者も多いワケで……

「……………ズウウウウウウン……………」

美咲達を含めた多くの者が落ち込む中でシアは密かにガッツポーズをしてした……………

そして決まったりリオン達の中での組み合わせは……………

リオン＆シア

ライハ＆リン

ソフィア＆澪

美咲＆楓

朝倉＆海斗

となった……………

「何でペアが女の子じゃなくてコイツなんだーーーー!!」

「ハッハッハ

諦める谷崎 これも運命だ」

「いやだーーーー!!」

哀れ 谷崎 海斗よ

第8話・リオンラバーズ結成！？（後書き）

自分の文才のなさに泣けてきます・・・

この回でリオンラバーズに新たに二人が追加されました

まだ増えると思います

ライハラバーズも作れたらいいなあと思います

第9話・誕生日パーティー（前書き）

はい、どうもこんにちは
創世神です……

第9話・誕生日パーティー

大会組み合わせが決まってから数日後・・・

「・・・・・・・・」

只今俺ははつきり言っておりあまりよろしくない状況にある

その原因は・・・・・・・・

「・・・・・・・・」

こいつだ

こいつの名前は【ティアナ・スカイアル】

両サイドの髪の毛のほうに焦げ茶色で他がピンク色の髪に蒼みがかかった翡翠色の瞳で会長に負けず劣らずの抜群のスタイルを持ったヤツだ

シア達八大美女の一人でもあるらしい

少々感情が少ない感じの不思議系美少女だ

前に一度食堂で困ってた様子を助けたら、何故か異様に懐かれた

今も故意にやっているのかは知らないが、そのやたら柔らかいものを押しつけて俺の腕に抱きついていて

しかし、俺も一応健全な男子なワケで・・・・・・・・その柔らかなものがあたる度に体が反応してしまうのは悲しい男の性というヤツだろうか・・・・・・・・

「「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」」」

『な、なあティア少し離れてくれると有難いんだが・・・・・・・・』

何かシア達がめっちゃこつち睨んでるんだよ！！

流石に無理矢理離すワケでもないかないのでそう説得を試みてみた

ちなみにティアはあだ名だ

「・・・・・・・・嫌？」

そう言つてコクンと首をかしげる

『グハッ！！』

（テ、ティア流石にそれはヤバいぞ！？）『

その仕草にリオンは見事にノックアウトされた

「ティアナさんいい加減リオンくんから離れてよ！！」

我慢に限界がきたシアがティアナをリオンから引き剥がしにかかる

「・・・・・・・・でも、リオンはいいって・・・・・・・・」

「でもじゃなーーーーーい！！」

「そうです！ティアナさんは少しリオンさんにくっつき過ぎですよ！！」

「私だってリオンに抱きつきたいのに！！」
その言葉に他のメンバーが続く

「……嫌」

しかしティアは更に抱きつく力を強めて抵抗をみせた

『お、穏便に行こうぜ（汗）』

「「「リオンくんは黙ってて！！」」「」」

「なあ朝倉」

「何だ谷崎よ？」

「俺達完全に蚊帳の外って感じたよな？」

「今更だな」

「……何か泣けてきた」

「ティアナさ〜ん先生が読んでましたよ〜？」

そこへリオンにとって救世主とも呼ぶべき楓がティアナを呼びにきた
楓はティアナとはかなり中がいいのだ

「・・・・・・・・わかった」

そういつて渋々ティアナはリオンから離れた

「・・・・・・・・じゃあねリオン・・・・・・・・・・チュッ」

「「「なっ！！！」」」

『おう、じゃあな』

ティアナは別れ際にリオンの頬にキスをして楓の方に走っていった・
・・・・

しかしティアナは感情が少々乏しいのに以外と積極的であるがリオンはいまいちわかっていなかった・・・・・

「リオンくん今度は私の番だよね？VV」

「違います！

リオンさん私ですよね？」

「リオン私だよね？」

「「「・・・・・・・・」」」

三人は互いに睨みあつて火花の音がバチバチと聞こえる気がする・
・・

そしてリオンは

『（はあ、疲れる）』

リオンよ ご愁傷様である……………

▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲

所変わって生徒会室

現在リオンは美咲に呼び出されて生徒会室まで来ていた

『会長。何だよ用事って？』

「実は、私今日誕生日なの」

『それはおめでとう』

「でね？実は今日私の誕生日パーティーがあるんだけど、リオくん
にそれに出て貰いたいんだ」

拒否権は．．．．．あるワケないか．．．．．

「当然だよ」

じゃあ……パチン」

バ
バ
ッ
!
!
!

美咲が指を鳴らすと沢山の黒服の男達が出てきていきなりリオンに袋を被せた

「もがっ！！」

「ごめんね？リオくん。会場着くまでだから」

こうしてリオンは見事に誘拐されたのだった……

▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼

おそらく30分くらいだろうか

ようやく車の止まる感じがして袋がとられた

でかくね？

「美咲様のお誕生日パーティーですので」

リオンが率直な感想を述べると隣に使用人の人達がいた

「リオン・クラウディア様ですね？」

美咲様からお話は伺っております。どうぞ此方へ」

リオンは建物の奥に通された

「ここでお召し物を着替えてもらいます」

確かに学校の服装ではまずいだろつとリオンは考えて差し出された服を素直に来た

「リオくん着替え終わった？……わぁ流石リオくんよく似合ってるよ」

「さんくー」

会長も似合ってたぜ」

「えへへーそうかな／＼／＼／」

リオンの服装はスーツ姿でいかにも高そうなスーツだ
上着もカッターシャツもネクタイも全てが黒のスーツだった

この系の服は結構着る人を選ぶのだがリオンは恐ろしく似合っており、リオンの為に作ったんじゃないかと思わせるほどリオンはカッコよかった

美咲は薄い水色のドレスを着ており派手すぎず地味すぎず清楚な感

じで美咲の感じによく合っていた

他の男が見たら間違いなく見惚れる位美咲は綺麗だった

しかし相手はあのインセンシビリティ・キング 鈍感王の異名を持ったリオンだ

当然普通の反応は期待出来ない

「美咲様、リオン様そろそろパーティーが始まります

リオン様は会場へ美咲様は此方へ龍緋様と桔梗様がお待ちです」

龍緋 桔梗 とは美咲の両親で夫の龍緋は神夜財閥の最高責任者だ

「じゃあねリオくん
また後で」

『おお』

▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲

『（結構いるなー
この広さじゃ当たり前か・・・何か見たことあるような、ないようなヤツがチラホラいるな・・・まあい

いやそれよりも飯だ飯♪

流石プロの料理人の料理はうめーな♪」

そうこの会場にはかなりの数の有名人がいるのだが、リオンは目の前の料理に夢中で全くといっていい程気にしていなかった……

しばらくして会場が暗くなり司会が挨拶を始めたがりオンは全く気に止めず料理を食べ続けていた

「続きまして、今回の主役 神夜 美咲様のご登場です!!」

会場が大きく盛り上がった

「この度は私の誕生パーティーにご出席いただき、まことにありがとうございます。」

どうぞごゆるりとお楽しみ下さい♪」

美咲の凜とした声が響いた

しかしやっぱりリオンは目の前の料理に夢中だった……

・
こう言うのを世間一般的に「花より団子」と言うのだろうか……

また暫く時間がたち、美咲の父親の龍緋がマイクを持った

「今から美咲の婚約者をこの中から決めたいと思う」

再び会場がざわめきだした

『（成る程、若い年齢の男が異様に多いのは、この為か……
……まあ俺には関係ねえや。別に何処かの会社や財閥の
御曹司であるワケでもねーし。金はあるけどな」

さあて飯だ飯♪）』と思い食事を再開しようとしたが

「さあアナタも前へ」

使用人の一人がリオンを美咲の婚約者候補の方へ行かせようとする

『いやいや、俺別に金持ちじゃないんで関係ないツスよ』

「この会場にいる美咲様に年齢が近いお方は全員参加です」

『はあ、わかったよ（うわあ〜マジでめんどくせー

なんかアイツらこっち睨んでるしよ

ああ？やんのかコラ？零距離で《雷の暴風》ぶちこむぞコラー！！（）』

なにやらかなり物騒な事を考えているリオンだった

会場の若者が全員集まって並び終わると、龍緋は執事に言いつけなにやら球体状の物を取り出し　一人ずつその中に手を入れさせた

『（アレは魔力量を測定するヤツだな

俺は普通の魔力はほぼ0だからな　多分というか絶対Gだな）』

この世界では魔力量によってランクが決められている

最高がSSS+これはリオンの母親位である。ブレイズはSSSだ
そしてSS+S、AAA+A、B+Gである。Sランク以上は
滅多にいない大抵はD+AA+位だ

低くてもEは普通はある。Gは最低ランクで犬並かそれ以下だ

ちなみにリオンの持った特別な魔力を普通の魔力に変換した場合軽くSSS+をオーバーして完全に測定不能になる

『（この場にいるヤツは・・・やはり大企業の御曹司と言つべきか、全員がB+ランクだ・・・）』

そんなことを考えていると、リオンの番になった

龍緋はリオンが測定球に手をいれると顔をしかめた

『（まあ最低のGだからな・・・一応自己紹介しとくか・・・）』

名前はリオン・クルー　あゝ君はもういいよ。下がりたまえ』

リオンが自己紹介しようとする、次に並んでいた見るからに金持ちって感じの青年が話を遮ってきた

「まったく、美咲さんの友人というから多少は期待したのに何だねその魔力量は？G？そんなの無いのと一緒にではないのかね？

まったく平民を通り越してゴミだな。

さつさとこの会場から出ていきたまえここは僕のような高貴な者が来る場所だよ？

君のようなゴミが来ていい所じゃない」

後ろで会長が怒って攻撃魔法を使おうとしているの両親や周りの使用人達が必死に止めているのが見える

この者達はどうせ会社の権力が会長の体目当てだろう

この程度の者達をあの敵しそうな会長の父親が認めるはずがない。

会長もこの婚約を嫌がっている様子だからな・・・ここで俺が大人しく帰れば万事解決だなとリオンは思い、会場からさつさと出ようと考えていた。あの言葉を聞くまでは

「まったく親の顔を是非とも見てみたいものだね。ああこんなゴミの親だ。親も当然ゴミか」

コイツは今何て言った？

親父や母さんがゴミ？

リオンは口では言わなくとも魔法が使えなかった頃に諦めずに一緒に修業してくれた両親に心から感謝してとても大切にしている

『おい、貴様

すぐに今の言葉を訂正し、謝れば半殺しで許してやる』

「Σ!？」

美咲はいつもと違うリオンを見て思い出した

前に親衛隊の一人が誤ってリオンの両親を侮辱してしまった。その事にリオンがキレてその生徒は半殺しになった・・・もしライハやシア達が止めなかったら、死なずとも二度とまともな生活を送ることはできなくなっていただろう

それより“リオンの両親を絶対に侮辱してはいけない”が学園の中での絶対的なルールとなった

あの時はリオンと重ねて適当に侮辱だけで半殺しになったのだ。それをゴミなどと言ったらリオンは本当に殺してしまいかねない

「お父さん!!今すぐあの人を止めて!!!!」

「落ち着きなさい。美咲。どうしたの？」

両親に必死に美咲が頼むが、

「言葉を訂正しろ？」

何故君のゴミ親のために僕が謝らなければならないんだい？身分をわきまえたまえ！まったく君のゴミ親はどんな教育をしたんだろうっね？」

ブチッ

『……………す……………』

「ん？何か言ったかね？」

リオンがボソリと何かつぶやくのを聞き取れずリオンを見下しながら聞き返すがうつむいたままで上手く聞き取れなく

「おい、僕を無視とはいいい度胸じゃないか」

と言ってリオンの胸ぐらを掴もうと手をだしたその時……………

・

——ソワリ——

とその場にいた人間の誰もが感じたことのない莫大な殺気がこの空間を支配する……

誰も動かない否動けない 未だかつてこれ程の殺気を感じたことがあったであろうか？ その場にいるリオン以外の人間が一人の例外もなくそう思った

周りの人間は思った。あの青年は決して触れてはいけない神の逆鱗に触れたのだと……

青年は思った。自分はどうしてもないものを敵にまわしてしまったのかと……

『殺す！殺す！殺す！殺す！殺す！殺す！殺す！殺す！殺す！殺す！殺す！絶対に殺す！徹底的に殺す！制限なく殺す！欠点なく殺す！欠陥なく殺す！思想なく殺す！願いなく殺す！容赦なく殺す！情けなく殺す！死んでも殺す！完膚なきまでに殺す！』
そう言つてリオンは青年の首を掴む

ガシツッ！！！！

「ヒィッ！！」

『俺は貴様に忠告した！もう一度言えば殺すとしたし貴様はそれを破った！十全十全滑稽滑稽滑稽滑稽のうえに滑稽をかさねてもたらないくらい滑稽だ！！そんなに殺して解体して並べて揃えて晒してほしいならてめえの望み通り 殺して解体して並べて揃えて晒してやるよ！！！！』

許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さないサナイユルサナイユルサナイ絶対許さない俺の両親を二度も侮辱したコイツを

俺は許さない

「ガッツ・・・・ハッ・・・・・・」

ギリ・・・・・・

青年の首をしめる

誰も止めない止められない

『てめえだけは許さない……ブツ殺す……』

ギリ………

青年の首を更に締め上げる

既に青年は意識が朦朧としているのだろっ
白目をむいている………

『死ね』

もう少しで息の根が止まる所で声がかかった

「ッッ！や、止めなさい……！」

美咲の父 龍緋だった

気付くとリオンの周りは武装した警備兵に囲まれていた
「その手を放しなさい」

リオンは青年に集中的に向けていた殺気を龍緋と周りの警備兵に向けた

「『ゾクッ！』『ゾクッ！』『ゾクッ！』」

言葉では言い表せないような寒気が龍緋達を襲い殺気に耐えきれなくなつた警備兵が倒れ始める
命を驚掴みにされているかの様な感覚

「落ち着きなさい！」

龍緋が再び説得を試みる

『うるせえよ』

俺がイラついてるのはコイツだけじゃねえんだよ

そこにいる糞共全員だ』

そう言つて婚約者候補の男達を見る

『何だてめえら？見るからにこの会社の権力や美咲の身体目当てなのが見え見えじゃねえかよ！』

てめえらの中に美咲の幸せを考えるヤツは一人もいやしねえ！！ふざけんなよ！相手の幸せも考えねえくせに何が婚約者候補だ！』

リオンの言つてゐることはまさに正論だつた

『しかし、それだけならその美咲の父親が何とかするだろう俺が干渉するトコじゃねえかもしれねえが、コイツは忠告したにも関わらず二度も俺の両親を侮辱しやがった。コイツに喋る価値はない。』

眠る価値はない。人を侮辱する価値はない。許しをこう価値はない。
後悔させる価値はない。息をする価値はない。コイツに……………

生きる価値はない』

そう言って青年の命を刈り取ろうとした瞬間

パンッ

美咲に叩かれていた

「駄目だよりくん
確かにこの人はアナタの両親を侮辱した
だけど、この人を殺したらきつとアナタの両親は悲しむと思う。お
願いだから止めて」

リオンは静かに青年から手を放した

ドサッ

青年は床に落ち直ちに病院に運ばれた

『悪かったな会長』

今もとに戻す・・・・・・・・パチン』
リオンが指を鳴らすと・・・・・・・・

「あれ？今何があつたんだっけ？」

「さあ？何かわからないわ」

「へっ？」

『会長と会長の家族以外全員の記憶を消して
さっきの事は誰も覚えていない
パーティーを再開するといひ・・・・・・・・
俺は少し頭を冷やしてくる・・・・・・・・』

そう言つてリオンは中庭に出ていった

『ハア、何やってんだよ俺は
しっかし、会長には悪いことしたな．．．．パーティー台無しに
しちゃったし．．．．．』

リオンが自己嫌悪に陥っていると、美咲が会場から出てきた

「リオくん．．．．．」

『ハハ 悪いな会長パーティー台無しにしちゃって．．．．．』

「ううん 大丈夫だよ」

『それにしてもあんなに簡単にキレるなんて、俺もまだまだだな．．．．．』

「でも、許せなかったんでしょ？リオくんのお父さんとお母さんを
侮辱したあの人が？」

『だけど、それで会長に迷惑かけて．．．．．最悪だな俺』

「違うよリオくん。私嬉しかったよ？リオくんが私の事をあんなに
考えてくれてたんだもん」

『．．．．．ありがとな会長』

「あの……出来ればさっきみたいに美咲って呼んでほしいな……／／／／」

美咲は照れながらそう言った

『フツ 分かったよ美咲』

リオンはそう笑顔で返す

「うん！」

美咲も笑顔になる

『悪いな美咲プレゼント用意できなくて』

「ううん、仕方ないよ 私が無理矢理連れてきちゃったし」

『でも、流石に誕生日なのに何もあげないってのは気が引けるな……
……何かして欲しい事ないか？俺ができる範囲なら大丈夫だが……』

すると美咲は少し考えて

「じゃあ、リオくんキスして欲しいな」

『……悪いワンモアプリーズ』

「だからキスして欲しいなって／／／／」

『いいのか？俺で？』

「うん、リオくんじゃなきゃ絶対いや」

『・・・・・・・・わかった』

リオンはそう言って美咲を抱きしめる

「リオくん・・・・・・・・んっ・・・・・・・・／／／／／／」

リオの唇と美咲の唇が静かに重なる・・・・・・・・

どのくらい唇を重ねていただろう、それは次第に過激なものとなっていた

リオンはすぐに離すつもりだったが、美咲は自分の舌をリオンの口の中にいれてリオンの舌に絡ませていた

「・・・・・・・・んう・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・ん・・・・・・・・／／／／／／」

くちゅ　くちゅ　　といやらしい音になる・・・・・・・・

「・・・・・・・・ぷはぁ」

美咲が口を離すとリオンとの間に銀色の橋が渡る

『美咲・・・・・・・・』

「えへへ 私初めてだよ？でも、ファーストキスはリオくんって決めてたんだ」

『まあ美咲がいいならいいか……』

こうして美咲の誕生日パーティーは幕を閉じたのだった……

第9話・誕生日パーティー（後書き）

すいません！

今回はかなりシリアスな感じが入ってしまいました！

是非とも戯言シリーズを加えたかったので、申し訳ありません

これからはできるだけ甘くしていこうと思います！

ちなみに新キャラのティアナはそ。のおとしもの のイカロスをイメージしていただければ大丈夫だと思います！というか、ほぼそのまんまです！

第十話・武闘大会と一方通行と超電磁砲（前書き）

久しぶりの更新です・・・

すいませんテストやら何やらで忙しかったので・・・

第十話・武闘大会と一方通行と超電磁砲

何日かが過ぎ大会当日

流石に数万の国民に見られ、更に王族まで来るというのだ
殆どのものがガチガチに緊張しているようだ

『「ふわあ~~~~」』

やはり例外はいた……

言わずとも、リオン＆ライハだ

すると、海斗が

「お、おい！何でお前ら箒持つて来てねーんだよ！」

そう、ここにいるものは緊張しているものの装備は万全のようだ。
ローブや杖に箒はもちろん、魔法銃や魔法薬を持って来ている人も
いる

『「必要性が感じられねーな」』

「必要性つてお前ら……」

『選手入場の時間になったら起こしてくれ』

「俺もよろしく」

「えー………寝てる」

海斗が聞き返す前にリオン＆ライハは居眠りを始めていた

「はう……緊張するよ」

「うん、みんなが見てると思うと………」

「しっかりしなさい！楓！シア！私達一年生は出番が最初だからし
っかりいくわよ！」

女性陣も同じのようだ

緊張しまくっているシアと楓にリンが渴をいれる

毎年大会は学年別で予選があり、そこで勝ち抜かれた者達で本選を
行うのだ

初めは当然経験の浅い一年生からで、観客達もお遊び程度でたいし
た期待も持っていなかったが、それは一瞬で覆されることになる……

「只今より、ルナティアス武闘大会を開催致します！」
それから暫くダラダラと大会説明があった

「それでは、さっそく試合に入りたいと思います

第一回戦は、リオン・クラウドニア&シア・セフィラス 対 マイ
ク・ドータ&板橋 雄大 です！」

『シア まだ緊張してんのか？』

「ううん、もう大丈夫だよ！」
どうやら緊張は解れたようだ。

「おい！何俺達のシアちゃんと仲良く喋ってんだよ！」

『ああ？うるせーな
ゴチャゴチャ言ってるでさっさとこいよ』

「待って

今回は私だけでやらせて」

『大丈夫か？』

「うん、こう見えて私けっこう魔法は自信あるんだ」

『わかった

けど、ヤバくなったらすぐに俺が行くからな』

「うん！」

「ルールは皆様をご存知のとおり、戦闘不能、ギブアップで決着！武器・魔法に使用制限なし！！それでは……試合開始！！」

バツ

シアが敵の攻撃範囲から出るため、後ろにさがる

「悠久なる風よ、我に力をかしたまえ
疾風を纏いて吹きすさべ！！

《天駆ける風》！！！！」

ズシャアアン！！

巨大な竜巻が相手に直撃した

相手も防御魔法を使うが、それも虚しく吹き飛ばされた

「な、何と・・・瞬殺！！シア選手いきなりの大魔法で相手チームを瞬殺です！これは凄い！」

ウアアアアアア

会場もまさかの展開に驚いている

『やるなシア

お前けっこう強えんだな』

「へへ／／／／／」

リオンが誉められやる気が出たシアは予選を全戦一人で戦って勝ってしまった・・・・・・

本戦出場選手控室

『おーライハ！リン！やっぱし残ってたか！』

「はっ、あったりまえだっつーの」

「そつえばアンター一回も戦ってないわよね？」

『おお、シアが任せろつつたから任せた！』

「おい」

リオン達が話していると、上級生らしき男が話しかけてきた

『何だよなんか用か?』

うわーなんか見るからにうざそうなヤツだー

「誰がお前に用があるつつったよ。俺様が用があるのは後ろの女二人だ」

どうやらこのやたらに偉そうなヤツは俺じゃなく、シアとリンに用があるっぽい

「なんでしよう?」

「お前らが気に入った。喜べ俺様の女にしてやる」

はい、見事な自己チュー来たー!

いきなり自分の女にしてやるってバカかコイツ。バカなのか?

「いやよ。何でアンタなんかの女にならないといけないのよ」

当然の如くリンは断った

まあそれが普通だろうな

「黙れ。俺様にくちごたえしてんじゃねえよ

俺様はあのノートス家の次期当主だ。

お前ら黙って俺様の言うこと聞いてりやいいんだよ

いいのか?その気になりやお前の家族をどうすることも出来るをだぜ?」

「くっ!.....」

シアの話によるとノートス家は神夜財閥には劣るもののかなりの権力をもつ家らしい

しかし、コイツ家族を人質にとるなんて糞だな

流石に助けないワケには行かないな

『「おい！いい加減にしろよ糞野郎」』

どうやらライハも同じ事を考えていたらしい

『黙って聞いてりやよー意味わかんねーことばっかほざきやがって』

「ああ？てめえ誰に向かって言ってるのか理解してるのか？猛火の二つ名を持つハイド・ノートス様だぜ？」

「うるせえよ。親の権力振りかざすしか脳のねえヤツがデカイ口叩くんじゃねーよ」

「てめえ……丁度いいその黒髪は確か俺様の次の相手だったな。なめた口聞きやがって叩きのめしてやるよ」

『はっおもしれー』

『いぜやってやるよ』

「言っておくが、てめえが負けたらその女は俺が貰うからな
まあ精々頑張りな」

そういつてハイドは帰っていった

「ちょっと！大丈夫なの！？相手は二つ名まで持つてるのよ!？」

二つ名……それは力が認められた者のみが与えられる勲章である

「リオンくん……」

流石にリオンの強さを知っているシアも心配そうだ

「全く問題ねーな
だろ？」

『たりめーだ』

ライハの問いに当然の様に答える

「まもなく本戦第一回戦を始めます
出場選手は闘技場へ入ってください」

『じゃあ行ってくるわ』

「負けんなよ」

『あつたりめーだ
俺を誰だと思つてやがる』

「はっだな」

そしてリオンとシアは闘技場へ向かった……



闘技場

「よく逃げなかつたな
ほめてやるう」

『てめえ程度に逃げる？
ありえねーな』

「その減らず口すぐにきけなくしてやる！」
と、火花を飛ばしていると

「それでは、本戦一回戦を始めたいと思います！
ルールは予選と同じです！どちらが戦闘不能又はギブアップで試合
終了です
それでは・・・・・・・・・・・・・・・・試合開始！！」

「俺様の猛火で消し炭にしてやるよ

あまねく炎よ！かのを焼き尽くせ！
《業火の鉄槌》！！」

ゴオオオオオ

ハイドの手のひらに巨大な炎塊が出来上がる

「おおーっとハイド選手いきなりの大魔法です！これはリオン選手ピンチだー！！」

ハイド選手は猛火の二つ名を持つ猛者です！予選でもその力は十分に出されておりました！

しかし、リオン選手はまだ一度も戦っておりません！これはいきなりの決着になってしまうのかー！？」

「今更後悔しても遅いぞ？

消し炭になりな！」

ゴオオオオオ

巨大な炎塊がリオンを襲う

なにかわしたり、防ぐ素振りを見せないリオンにハイドは勝利を確信するが

ギュン！ドオオオオン！！

ハイドの放った炎はリオンに当たる直前で跳ね返った

「何ー！！」

間一髪でそれをかわすハイドしかしハイドのパートナーはかわしきれず炎のくらって気絶した

『何ですかア？何なんですかア？その弱っちい攻撃は？』

リオンは学園都市合計230万人の頂点に立っている序列第一位の能力《一方通行「アクセラレータ」》を使い炎を簡単に跳ね返した

「な、何が起きたのでしょうか！？ハイド選手の上級魔法《業火の鉄槌》がリオンに当たる直前で跳ね返った様に見えましたが、これは一体どういうことだー！？」

そう、この世界には防ぐ魔法はあっても、跳ね返す魔法なんてものは存在しないのだ
皆が啞然としている

ハッハッハそんな炎《一方通行「アクセラレータ」》の能力の前には無意味！

しかしこの能力は便利だなー皮膚上のあらゆるベクトルを操るって完全に反則だよな？まあそれを使ってる俺も反則だけだなー！

「なっ何だお前！何しやがった！？」

おうおうかなりビビってんな

まあ自分の自慢の炎をあっさり跳ね返されたらそうなるか……

『バカかお前？教えるワケねーじゃん』当たり前だよなー何でこんなのに俺の能力教えなきゃいけないーんだよ

『おいおい何ですかア

あんだだけ自慢してたくせにこの程度かア？』

「くそ！調子にのりやがって

いいだろう。俺様の最強魔法くらわせてやる！」

どうやら次の魔法はコイツの最強魔法らしいなそれなら……

『じゃあ早くしろよ』

「後悔すんなよ

炎の精霊よ地の精霊よ私の声に応えたまえ……………

……今一つに集いて我が敵を焼き払え！！

ハアアアアアア

ハイドの周りをさっきのとは比べ物にならないくらいの炎が立ち上る

「これで終わりだ防げるもんなら防いでみやがれ！」

どうやら最強魔法だったのは本当らしいな……………それなら……

・

リオンはポケットから何の変哲もないコインを一枚取り出した

「何だ？そんなもんで俺様の魔法が防げるとでも思ってたのか？」

どうやらハイドは自分の最強魔法が出せたことで勝利を確信してるらしい

『なあ、超電磁砲^{レールガン}って知ってつか？』

「あ？」

『理屈はリニアモーターカーといっしょでな、超強力な電磁石を使って金属の砲弾を打ち出す艦載兵器らしいんだけど』
そう言いながらリオンは軽くコインを弾いて真上に上げる

回転するコインは最頂点で一度止まり重力に従い落ちてくる

「何ゴチャゴチャ言ってやがる！
だがこれで終わりだ！

《大地の獄炎》！！」

ゴオアアアアアアア

岩石を纏った巨大な炎がライハに向かう

『ーーーーこうゆうのをいうらしいんだよ』

コインがリオンの手に落下する直前に発せられた言葉と同時に手から光が奔った

オレンジ色の光の矢

闇に慣れていない目のまま懐中電灯で素早く線を引いたような感じだ
しかしスピードはそれを遥かに上回っている

ドゴオオオオン

轟音とともに一筋のレーザーとなったそれは地を砕きながらハイドの最強魔法をあつさり打ち破りハイドに直撃した

「グハツ・・・・・・・・」

バチィ バチィ

リオンの手から電気音になる

『まあ手加減したし死なねーだろ』

にしてもやりや結構できるもんだな

しかし、まさか某ビリビリ中学生の必殺技がここまでの威力とは・
・・・

「な、何と！リオン選手ハイド選手の大魔法《大地の獄炎》をあつさり打ち破ってしまったー！！！！

更に先程のと、同様に正体のわからない魔法を使いました！

これは恐ろしい一年生が現れた――！！！！！！！！！！」

リオンの戦いに暫く会場は大興奮していた

第十話・武闘大会と一方通行と超電磁砲（後書き）

リオン強っ！！

リオンさんの強さがべらぼうに高いです・・・

次回は遂にリオンとライハが激突します！！！！

第11話・リオンとライハと決勝戦？（前書き）

今年に入ってはじめての更新です！

なんとなく二つに分けてみました（笑）

第11話：リオンとライハと決勝戦？

リオンが超人的強さで勝利し、その後リオンペアとライハペアは順調にトーナメントを勝ち抜きついに……

「さあ！遂に決勝戦となりました！

数々の猛者を打ち負かしこの舞台に立つのはなんと2チーム両方が一年生チーム！！

まさにダークホース同士の戦いとなりました！

さあでは選手を紹介して参りましょう

まず西のゲートから現れたりオン・クラウディア&シア・セフィラスペア！

このペアは前半はセフィラス選手の見事な戦いを見せて頂きましたが、なんといつでも注目すべきは本選に入ってはじめてその实力を見せたクラウディア選手！

二つ名を持つノートス選手を無傷で倒すなどいまだその実力は底が見えませんか！！

決勝戦どんな戦いを見せてくれるのか非常に楽しみです！！！！

そして東のゲートから現れるのはライハ・レオンハート&リン・ルンクスペア

こちらルンクス選手も優秀ですが、やはりレオンハート選手！
型にはまらない独特な戦法で幾多もの猛者を打ち負かしてきました！

お互い男性選手が飛び抜けた実力を誇っています！

これはルナティアスの歴史に残る闘いが期待できそうです！！」

そして両者が向き合う

『やっと決勝か』

かなり面倒だったな全然大したことねーヤツばっかだったしな

「そついえば初めてだな
お前とマジで闘り合うの」

『まあいいじゃねーか楽しもーぜ！』

二人とも久々に戦える強敵に心を踊らせる

「 それではルナティアス武闘大会決勝戦を始めます！！ 」

『 シア／リン 』

「 分かってるって 」

シアとリンは、リオンとライハの声を聞き舞台から退く

「 セフィラス選手とリンクス選手が闘技場から降りました！
これはどうやら大将同士の一騎討ちになりそうだーーーーー！ 」

シリ・・・・・・・・

『 ・・・・・・・・ 』

最早二人の耳には他の雑音は入ってはいない

そして二人の間に一枚の葉が落ちる

カサッ

ズドオオオオオン！！

大きな爆発音が響き開戦の合図となった

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ダッ！

ほぼ同時に飛び出す二人

『ハッ！』

ガガガガガガガガガガガガガガ！！！！！！

二人は目にも止まらぬスピードで打ち合う

バッ！

一瞬間が空き二人は後ろに下がり呪文詠唱を開始する

『《来れ雷精、風の精

雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐》』

「《我が手に集え風雷の精霊よ

今一つ束なりて吹き荒れろ》」

『いくぜ、オラァ！！』

《雷の暴風》！！！！！！』

「くらいやがれ!!」

《雷の嵐》!!!」

ドゴオオオオオオン!!

二人の放った魔法が激突する

「こ、これは凄い!

目にも止まらぬ高速体術の後の大魔法!!
試合開始直後からすさまじい攻防です!

これは最後まで目が放せません!!」

などという声もするが二人は全く耳に入っていないかった

「へっやるじゃねーか!」

『あつたりめーだ』
ガキイン

ズガアン

再び高速の組み手をしながら話す

「食らいな!

《紫電槍》!!」

ガガガガッ！

ライハが放った無数の雷の槍がリオンを襲う

「チッ

」

リオンはそれはバク転の要領でさける

「《断罪の剣》」

「《疾風の蒼剣》」

ガキーン！バキーン！

ガガッ！ズシャ！ズバァン！

今度はお互いに魔法剣で切り合う二人

そして戦いは次第に空中戦にあがって行きお互いが《虚空瞬動》を使いながら切り合っていた

リオンが剣を振るえは空気が震え衝撃波が発生しライハが剣を振るえば地が割れた

会場の誰もが学園に入って間もない二人の一年生がする戦いに言葉を失っていた………

『《おお、地の底に眠る死者の宮殿よ、……我らの下に姿を現せ

冥府の石柱》』

巨大な石柱が複数空中に出現しライハに向かって落下し、

ズドオオオン

そのひとつがライハを押し潰した……が、

「ウラアア……!!」

ドカア……ン!!

ライハは魔力を拳に集中し石柱をブチ壊した

『あーやっぱし無理かー』

「次はこっちの番だ!

《ライトニングアロー》」

『単発で放つても意味ねーよ』

ブオン

ガキイン ガキイン

リオンは魔法剣で矢を叩き落とす

「残念。狙いはこつちだ

《悠久の風鎖》」

バシユバシユ

魔法の矢の影に隠れた鎖がリオンの動きを封じる

『チツ』

「《目映く輝きし聖なる光よ、地を這いし罪深き魂に裁きの聖光を

神々の裁き》――！」

ヒュン

ズドオン、ズドオン、ズドオン、ズドオン、ズドオオオオオン――！！

巨大な光がリオンに降り注ぎ、その輝きに観客は目を瞑る

「おおーつと！？ライハ選手の光魔法がリオン選手に直撃――！！
リオン選手は大丈夫かああ！？」

辺りに煙が立ち込める

シュン

煙の中からリオンが出てくる

『いやゝ今のは危なかったなゝ』

「今の魔法の直撃を受けてほぼノーダメのヤツが言っても嫌味にか聞こえねーよ」

『まあいいじゃねーか』

んじゃま、続きといこーか？』

「ハッ！上等オオオ！」

ユルい会話の後に再び戦いは始まった

第11話：リオンとライハと決勝戦？（後書き）

課題に追われています・・・・・・もうクタクタです・・・・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9523h/>

まほらぶっ！！《異世界で最強チート主人公に転生してハーレムを作っちゃう

2010年10月9日19時11分発行